

別表5  
(3)

## 主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	太田 雅代
主 論 文 題 名 : 自閉症児をもつ母親の障害受容過程			
<p>(内容の要旨)</p> <p>【序論】</p> <p>自閉症児を養育することが家族に大きな影響を与えることは、疑う余地がない。特に母親は父親と比べて、自閉症児の養育に長時間直接的にかかわっている。したがって自閉症児をもつ家族の支援にあたっては、母親に焦点をあて、母親の心理的適応について検討することが重要である。従来わが国では障害児をもつ母親の心理的適応については、親がわが子の障害をいかに受け容れるかという障害受容の観点から研究が行われてきた。そこでは障害受容過程を段階に分けた上で、その数や内容が議論されることが多かった。しかしながら支援の観点からは、障害を受容するという心理的変容がどのような契機によってもたらされるのかを明らかにすることが必要であると考え。そこで本論文では、自閉症児をもつ母親が自閉症であるわが子を抱えて辿ってきた育児の過程を、障害受容の観点から再検証し、そこから見出された知見に基づいて、心理的変容の契機を明らかにし、支援のあり方について提言を試みる。また、従来の研究の多くは質的分析に基づいているが、客観性や作業の効率性といった問題点を克服する試みとして、本論文ではテキストマイニングを用いて分析を実施する。すなわち本論文は、従来の質的調査に則った方法で収集したデータにテキストマイニングを導入するという新しい応用事例であり、その有用性に関しても本論文を通じて明らかにしていくという意味合いを持つ。本論文は、以下の4つの研究から成る。</p> <p>【研究1】</p> <p>自閉症児を中心に、広汎性発達障害児をもつ親の心理に関するわが国の研究の動向を概観した。障害受容研究には、親の障害受容過程の経時的なモデルを作ろうとする研究と、親の心理に影響を与える要因についての研究という2つの枠組みがある。本研究もその枠組みを踏襲した上で、まず従来の主要な研究成果を整理し、次に2000年代半ば以降の研究論文を整理した。主要な結果として、①障害受容過程のモデルの代表的なものに段階説があり、これまで様々な段階説が提唱されてきた。しかし初期のショック期と最終期の安定期を含む点では共通しており、中間期にあたる葛藤期をいくつに分けたかの違いに過ぎない。②障害受容過程のモデルの研究は、従来は長い障害受容過程全体を対象とした研究がみられたが、近年はある特定の期間内の親の心理過程を詳細に記述する質的研究が多くなされている。③親の心理に影響を与える要因の研究は従来は少なかったが、近年増えつつある。の3点が得られた。さらに今後の課題と展望として、①段階説や障害受容の概念を、段階から段階への移行の契機に着目して整理する必要がある。②長い障害受容過程全体を捉えた研究が引き続き重要であるが、このようなデータの多くは半構造化面接等の質的データであり、量が膨大であることが多い。そのためこれを客観的に分析できる分析手法が望まれる。そのひとつの候補としてテキストマイニングが挙げられる。③要因の研究では要因選択の基準や心理の測定方法に改善の余地がある。という点を指摘した。</p> <p>【研究2】</p> <p>研究1の結果を受けて、2つの目的をもって研究を実施した。①「障害受容」という概念を今</p>			

一度整理するために、まず健常児の育児とは大きく異なることが予想される自閉症児の育児にはどのような特徴があるのかを明らかにする。②従来の質的調査に則った方法で収集したデータにもテキストマイニングを適用し、その有効性を検討する。の2点である。方法は、自閉症児をもつ母親19名に1対1の半構造化面接を実施し、逐語録をテキストマイニングによって分析し、クラスター分析を実施した。その上で、得られた結果を質的分析による従来の研究結果と比較した。その結果、母親からみた自閉症児の養育の特徴として、「家族のあり方」「遊びの困難」「知識や兄弟姉妹・友人の重要性」「医療と診断告知」「就園就学」の5つが見出された。これらは従来の質的分析による障害児の親研究および障害受容研究で得られた結果とほぼ同様の結果であった。さらに「知識の重要性」という従来この領域の研究では見出されなかった新たな知見も得られた。このように自閉症児の養育の特徴が網羅的に抽出された上に、テキストマイニングの有効性も確認された。

### 【研究3】

研究1で、段階説は研究者によって段階の数や内容がまちまちであることを指摘した。また研究2で、従来の質的研究の方法で収集したデータにテキストマイニングを適用する有用性を確認した。そこで研究3ではテキストマイニングを用いて以下の検討を行った。①自閉症児の母親の障害受容過程に実際に段階が存在するのかを検討した。②段階から段階への移行の契機を、「価値転換」と呼ばれる心的機構に着目して検討した。価値転換論は半世紀の歴史をもつ、障害受容の本質といわれる理論だが、段階説との関係は明らかにされていない。本研究では段階から段階への移行に価値転換がかかわっているのではないかと考えた。③障害受容に価値転換が関わっていた場合の、価値転換後の母親の心理がどのようなものであるかを精査した。方法は、研究2のデータに対してJaccardの類似性測度、共起ネットワークを実施し、共起語の出現した文脈を逐語録に戻って確認した。主な結果として、①障害受容過程には段階が存在する。②段階から段階への移行には、価値転換が契機となっている可能性がある。③価値転換後の母親の心理はいくつかの類型に分類できる。が得られた。

### 【研究4】

障害受容過程と移行の契機について研究3までで明らかにすることができたため、研究4では補足的に、障害受容研究の2つめの大きな枠組みである、母親の個人差を規定する要因に着目をし、研究を実施した。本研究で取り上げた要因は、その重要性に比べて非常に数が少ないとされている、家族構成等の家族を取り巻く環境の要因、とりわけ自閉症児と兄弟姉妹の要因であった。逐語録を「子どもが1人の母親の語り」「子どもが複数いる母親の語り」に分け、各部の特徴をJaccardの類似性測度、「兄弟姉妹」の類義語の出現頻度、「兄弟姉妹」の類義語の共起語の出現頻度、「兄弟姉妹」の類義語の共起ネットワークにより分析した。主な結果として、①子どもが1人の母親と子どもが複数いる母親では語りの内容に違いがある。②子どもが複数いる母親は、自閉症児の育児を俯瞰し、相対化する視点を獲得している。が得られた。

### 【結論】

本論文は自閉症児をもつ母親の障害受容過程について、段階説と価値転換を中心に、テキストマイニングを用いて検討した。テキストマイニングは質的データの分析において有効な手法であることが確認された。また障害受容過程には段階が存在することが確認された。さらに段階から段階へ移行する契機は、価値転換という母親の心理の変化であることが示唆された。加えて障害受容の個人差をもたらすひとつの要因に兄弟姉妹の有無があることが示された。これらの知見を踏まえ、母親への支援の提言をおこなった。